

## 敦煌の通俗詩「学郎詩」について

伊藤美重子

周知のように二十世紀初頭に偶然発見された敦煌文書の中には、これまでに知られていなかったさまざまな文献が含まれ、とくに当時の人々の生活がうかがえる資料はきわめて興味深く、貴重なものといえる。敦煌文書の中でも、題記をとまなう鈔本はその文献の性格を知る上で重要なものであり、当時の敦煌地区の学校の学生（当時の学生は「学生」という呼称のほか、「学士」「学士郎」「学郎」の呼称も用いていた）による題記、いわゆる「学郎題記」をとまなう鈔本が百余点存在し、そこから当時の学校や学生生活の様相がうかがえるのである。

学郎題記の多くは帰義軍節度使時期のもので、帰義軍期は州学、県学といった官学のほか、郷学、坊巷学などの末端の教育機関や私学では寺学や官吏の主催する私塾など多様な形態の学校が存在し、とくに寺学が活況を呈していた時期である。

学郎題記を集めてみると、題記のあとの余白に学生自らが詩を書きつけた鈔本がいくつか見られる。また、学生たちは何かの紙の余白、雑写の間に詩を書きつけたりしている。このような学校の学生が書いたとおぼしき詩を総称して「学郎詩」という。

一

学郎詩の多くは走り書きのような筆致で誤字や当て字もきわめて多く、お手本もなしに学生自身が書写したものと考えられる。

ここで学郎詩の例をあげてみる<sup>(1)</sup>。なお、敦煌文献の引用にあたっては、原則としてすべて当用漢字で表記し、判読不能の文字は○で示し、疑わしい文字には？を付し、誤字は（ ）内に訂正し、欠字は□、「」で示し、欠字が推定される場合は「」内に補う。

P三三三二は占いに関する文献を書写した鈔本であるが、その文献の書写の最後に「庚辰年（八六〇）正月十七日学生張大慶書記之也」と題記があり、そのあとに同じ筆跡で、次のような三種の韻文が記されている。

①首（手）悪筆若（弱）、多有厥錯。明師見者、即以「改」却。

②書後有浅（残）紙、不可別將帰。雖然無首（手）筆、但作五言書（詩）。

③明招（朝）遊上遠（苑）、火急報春知。花須連夜発、莫代（待）曉風吹。

①の韻文は「手は悪筆で、間違いも多い。明師よそれを見つけたら、どうか直してください」という意味で、詩というほどの内容はないが、いちおう韻を踏み書写後の謙遜をあらわした言葉となっている。次の②は「書写後にまだ紙が残っている、持ち帰ることはできない。下手ではあるが、五言詩を作ってみる」と記し、次の詩があたかも学生自身の創作の詩であるかのように書いている。しかしながら、実際には③の五言詩は張大慶の自作の詩ではなく、『全唐詩』卷五にみえる則天武后の「獵日宣詔幸上苑（獵日上苑に幸するを宣詔す）」である<sup>(2)</sup>。

書後に五言詩を書きつけるという内容の詩は、いくつかの鈔本にみられP三一九二の「論語」を書写した鈔本では「丙子年三月五日写書了、張〇〇誦」の題記に続いて次の二種の韻文が記されている。

書後に残紙、不可到将帰。雖然無手筆、且作五言詩。

三十餘年在戰場、百生千死位軍（為君）王。彫弓歲々恒看月、金鉀年々鎮被霜。

五言詩を作るといってもここでは五言でなく七言詩であり、さらにこの詩はS九〇三八にもその詩句がみえ、書写者の即興の詩ではない。<sup>(3)</sup>

P二九四七は仏教文献の書写のあとに「甲寅年四月十八日書記」とあり、さらに「書後に残紙、不可列（別）将帰、雖然無手筆、且作五言詩」と記すが、この後にはなにも書かれていない。

このような書写の後に詩を書きつける趣旨の常套句が存在するということは、詩作が書写者の間に広く行われていたことをうかがわせる。<sup>(4)</sup>そして、このようになんらかの文献の書写後にこのような書きつけを加える人物はどのような人々かを考えた場合、題記によって書写者が学生であることが明らかな場合はいうまでもないが、題記はなくともその筆跡や当て字の状況からみて学生に類する人々が記した可能性が高いと考えられる。

「学郎詩」を特に扱った専論は、項楚氏が『敦煌詩歌導論』（台北、新文豊出版公司、一九九三）の「第三章民間詩歌」の第六節として「学郎詩」を収集しているのが最初である。<sup>(5)</sup>項楚氏はその中で、学郎詩の多くは学生の情感を発露した即興の詩であり、また、学生の心境を最もよく表現した当時の流行の通俗詩であると述べている（同書二一〇頁）。項楚書では、学郎詩をその内容により、「学习生活即興、勤学発憤、戲謔嘲諷、情詩、書手詩、格言詩」の六類に分けて紹介している。徐俊氏は「敦煌学郎題詩作者問題考略」（『文献』一九九四—二）の中で、

学郎詩の多くは学生の即興の作であるとする見方に対して、確かに学生の即興の作も存在することは確かであるとした上で、同種の学郎詩がいくつかの鈔本にみえること、敦煌写本のみならず吐魯番文書や長沙の唐代の窯から出土した磁器の題詩にもみえることをふまえ、学郎詩の多くは（１）童謡、（２）民間流行の通俗詩、（３）民間俗詩の改作、（４）文人詩作のいずれかであると述べ、学郎詩への新しい見解を加えた。さらに、徐氏は「唐五代長沙窑瓷器題詩校證——以敦煌吐魯番写本詩歌參校」（『唐研究（卷四卷）』、一九九八）で長沙の唐窯から出土した磁器にみえる詩を収集整理し、そこに敦煌吐魯番文書もみえる詩歌が十一首あることを指摘している。そこには学郎詩もふくまれ、その詩は敦煌のみならず広い範囲で流行していた唐代の民間の通俗詩であることを明らかにした。

学郎詩が学生自身の作でなくとも、自分の心情を自分がよく知っている詩に託したり、既存の詩の改作をした<sup>⑦</sup>りして表現したものであることは確かである。「学郎詩」には学生たちの率直な思いが込められているといえる。楊秀清「浅談唐、宋时期敦煌地区的学郎生活——以学郎詩和学郎題記为中心」（『敦煌研究』一九九九—四）<sup>⑥</sup>では、学郎詩を資料にして当時の学生生活を再現している。

敦煌文学についての著作の中で、学郎詩についての記述するものは少ないとはいえないが、日本において学郎詩を収集し紹介する文は管見ではまだ見ていない。ここでは学郎詩の中から、いくつかの鈔本に共通してみえる詩、また学生の姿を髣髴とさせる詩をとりあげ、当時の学生の志向や心境の一端を紹介したい。

通俗文学作品に学郎題記をともし鈔本が筆者の調査では二十六点と比較的多く存在し、通俗文学作品も学校教材の一つであったと考えている。敦煌の通俗文学作品の享受者でもある学生たちはどのような日常をおくっていたのだろうか。

なお、参考までに筆者が収集した学郎詩の一覧リストを文末にのせておく。<sup>(8)</sup>

## 二

文献書写の後によく見られる詩は、謙辞と飲酒の戒めの詩である。

謙辞は前掲したP三三三二の書写後に最初にみえていた詩である。これとほぼ同じものがP二六〇四の「論語」を書写した鈔本の末尾に「噫短手若（弱）、自有決（闕）錯、明君見者、即以盖（改）却」とあり、P三四三三の「論語」の鈔本にも「手惡筆若（弱）、多有厥（闕）錯、明師見者、即与盖（改）却」とある。

P三七八〇「秦婦吟」の末尾には「手若（弱）筆惡、若有決錯、名（明）書（師）見者、決丈（杖）五索」とあり、終句を「決丈（杖）五索（鞭打ち五回お願いします）」に書きかえている。このP三七八〇には複数の題記が書写され、書写者の肩書きとして「就家学士郎馬富徳」と「学生童児馬富徳」の二種がみえる。「就家学士郎」とは「通学生」のことで、同人物が「学士童児」と称していることから、馬富徳はまだ学齡に達していない通学生と推測される。<sup>(9)</sup>

北七〇九五（冬九二）「四分律抄一卷」の「丙午年七月五日大蕃国肅州酒泉郡沙門法榮」の題記の後にも「写手惡筆、若多闕錯、後有明師、望垂改却」とあり、おそらく一般的な謙辞として用いられていたものを学生が借用したものと考えられる。

書写の間違いを戒める趣旨の詩で次のような詩も多くみられる。

写書不飲酒、恒日筆頭乾。且作随宜過、即与後人看（北八四四二（位六八））。

酒も飲まずに、毎日せつせと筆がかわくほど。うっかり書きちがえたら、後の人に見られてしまう。

これと同種のものがP二六二一、P二九三七紙背、P三三〇五にもみえ、好きな酒を我慢して一生懸命書写に  
つとめていても、ちよつとした誤りで、せつかくの苦勞をだいなしにしたくないという学生自らの戒めの声が聞  
こえるようである。

李正字「晚唐至北宋敦煌僧尼普聴飲酒——敦煌世俗仏教系列研究之二」(『敦煌研究』二〇〇五—三)によると吐  
蕃統治期から敦煌の僧尼の間では飲酒が許され、仏寺で酒が醸造され飲まれていたという。帰義軍期には寺学の  
学生は多くいたであろう。寺の僧尼の飲酒をみながら、学生たちは学業に勤めていたのである。

飲酒はやはり学生にとっては、強い誘惑であるせいか酒を戒める詩句がよく登場する。

郎君須立身、莫共酒家親。君不見生生(狻狻)鳥、為酒送(喪)其身(S三七二四紙背)。

郎君は身を立てねばならぬ、酒屋と親しむことなかれ。君は知らぬか狻狻鳥、酒のためにその身をほろぼ  
す。

この鈔本では、習字のためか、戒めのためか、この詩が何度も書かれている。

「狻狻鳥」とはどのような鳥かははっきりしていない。「狻狻」は『山海經』南山經に「有獸焉、其狀如禺而白  
耳、伏行人走、其名曰狻狻、食之善走(獸がいる、その状は禺(おながざる)のようで白い耳、伏してゆき人の  
ように走る、その名を狻狻という、これを食すればよく走る)」とある動物で、<sup>(10)</sup>「狻」は『広韻』(下平一二庚)に  
「猩」と同じとあり「猩」に「猩猩能言、似猿声如小兒也(猩猩は人の言葉をよくし、猿の声に似て小兒のよう  
である)」とある。唐の李肇『唐国史補』巻下に「猩猩者好酒与屐、人有取之者置二物以誘之」とあり、猩猩は酒と  
屐(くつ)が好きで、これを捕まえるにはこの二つで誘えばよいと記されている。唐の裴炎の「猩猩銘」(『唐文

粹』卷七八所収)に財色名利におぼれる人への戒めとして、猩猩の酒と履の話が引かれている。<sup>(11)</sup>この「狻狻鳥」について先行の校録ではすべて「鳥」と解釈するが、「鳥」はあるいは「寫(くつ)」の字を書いたもので、猩猩が「履物」を好むという故事を踏まえたものとも考えられる。写本のうえでは「鳥」と「寫」の区別はつきにくい。狻狻の「鳥」にしろ「寫」にしろ、酒におぼれる猩猩を戒めとして詠んだものである。

これと同じ詩がP五五五七紙背にみえ、詩の後に「丁亥年正月廿日靈図寺僧智弁書」とあり、僧侶が戒めとして書写していることがわかる。また、北七七二〇(淡五〇)紙背には「郎君須立身、莫共酒家親」の最初の二句がみえ、<sup>(12)</sup>またS四二九五紙背では、「第二」「第二」とかみしめるように、七言句にして「第壹郎君須立身、第貳莫共酒家親、第三君不見生々鳥、第四為酒送(喪)其新(身)」という。

この詩は、敦煌写本「茶酒論」の中にも「男兒十四五、莫与酒家親、君不見生々(狻狻)鳥、為酒喪其身」とあり、当時非常に流行していたものである。<sup>(13)</sup>

飲酒の戒めがあるいっぽう、次のような詩もある。

今朝悶会々(憤憤)、更將愁来対。好酒沽五升、送愁千理(里)外(P三三〇五)。

今朝は悶々と心暗く、憂鬱な気分になってきた。うまい酒を五升買い、愁いを千里のはてに送ろう。<sup>(14)</sup>

今朝到此間、酒前(錢)交須(誰)還。喫着壹盞料、面孔赤粃粃(鮮々)(P四五八八紙背)。

今朝ここに到り、酒代を誰かに返してもらおう(?)。一杯飲んで、まっかつか。<sup>(15)</sup>

一生愛酒不息(惜)錢、弟兄相喚悉拘牽。留而乞与一个褐、一頓喫却戰(展)脚眠(P四五二五紙背)。

一生酒を愛し金を惜しまず、兄弟互いに寄り集まる。留めて……、ひとしきり飲んだらゆっくり眠ろう。

三

黄金よりも学問が大事と詠む詩がある。

白玉雖未宝、黄金我未須（須）。心在千章至（張紙）、意在万卷書（P三四四一紙背）。

白玉は宝にあらず、黄金も私はいらない。心は何千枚の紙にあり、思うは万卷の書のこと。

白玉非為宝、黄金我未須。竟（意）〔念〕千張数（紙）、心存万卷書（P二六二二紙背）。

先にあげた徐俊「唐五代長沙窖瓷器題詩校證——以敦煌吐魯番寫本詩歌參校」によると、「白玉非為宝、千金我不須、意念千張紙、心存万卷書」の詩が、長沙の唐窯から出土した磁器にもみえている。徐氏は王梵志に名を託した通俗的格言詩を集めたものとみられる敦煌寫本の一巻本「王梵志詩」にも、「黄金未是宝、学問勝玉珎、丈夫無伎芸、虚露一世（黄金は宝ならず、学問は宝にまさる、男子たるもの伎芸なければ、むなしく一生をおくることになる）」<sup>(16)</sup>があり詩意は同じと述べる。

同様の趣旨の言葉は「丈夫学問隨身宝、白玉黄金未足珍」（「十二時」の歌辞<sup>(17)</sup>）、「積財千万不如明解經書」（「太公家教」）、「賜子千金不如教子一芸」（「雜抄」）など敦煌寫本には多くみえる。

学問をするには、それなりの心構えが必要であるとして、黄金よりも人の心意気が大事だと詠む詩もある。

遮莫千今（金）与万金、不如人意与人心。黄金将来随手散、不如人意進長存（P二六二二）。

たとえ千金万金といえども、人の心意気には及ばない。黄金はいずれはなくなる、進取の思いがあるに及ばない。



男子たるもの学問をして、ひとかどの人物になろうと詠む通俗詩は、学生の間で流行していたとみえる。

由由（悠悠）天上雲、父母生我来。小来学李（裏）坐、今日得成人（P三五三四）。

悠悠たる天上の雲、父母から我が生をうける。幼き頃より学問をし、いまやりっぱな人となる。

清清（青青）何（河）辺草、遊如（魚）水鳥鳥。<sup>(18)</sup>男如（児）不学門（問）、如若啗頭驢（北八三四七（生

二五）紙背）。

青々とした河辺の草、魚は泳げば水動く。男子たるもの学問をせねば、一頭のロバに同じこと。

「悠悠天上雲」と同じ詩が北八三二七（玉九一）紙背、中国書店蔵本では最後の句を「長大得成人」と変えた詩がある。「青青河辺草」の詩はS一七三紙背、S八四四八にもみえる。

その学問の先には、仕官があった。学問をして官位につきたいという願いを詠む詩がある。

高門出貴子、存（好）木出良在（材）。丈夫不学聞（問）、觀（官）從何処来（北八三二七（玉九一）紙背）。

高門からは貴子がでる、よい木からは良材がとれる。男子たるもの学問をせねば、官はどこからやってくる。

孔子高山坐、若（弱）水不欲流。之（諸）君在（不）学聞（問）、觀（官）從何処来（北八三二七（玉九一）紙背）。

孔子は高き山に坐す、弱い水は流れない。諸君が学問せぬのなら、官はどこからやってくる。

「高門出貴子」の詩はS六一四にもみえるが、敦煌文書のみならず吐魯番文書（アスターナ三六三号墓出土文書）の中にも「高門出己（拳）子、好木出良才（材）、交○学敏（問）去、三公河（何）処来」と同種の詩がある。<sup>(20)</sup>ま

た、長沙の唐窯から出土した磁器の題詩に、「天地平如水、王道自然開、家中無学子、官從何処来」の詩があり、徐俊氏はこれらの詩の関連性を指摘している<sup>(21)</sup>。

「孔子高山坐」で始まる詩がP三五九七の「唐詩叢鈔」<sup>(22)</sup>の中にみえ、「孔子高「山」座(坐)、弱水不能流、諸君在(不)学問、何敢該?君同」とある。

士官の願いは、「読誦須勤苦、成就始似虎。不詞(辞)杖捶体、願賜榮軀路(読誦は勤勉にせねばならない、成就すればまさに虎に似る。勉励の鞭もあえて辞せず、願うは榮達の道)(P二七四六)」、「学郎身姓「□」、長大要人求。堆(唯)虧?急学得、成人作都頭(学郎の姓は□、長じて人に求められたい。早く学業を修め、成人したら都頭<sup>(23)</sup>となろう)(北八四四二(位六八))」の詩にも表現されている。

学問をして仕官して、はれて役人として馬に乗り、よき伴侶を迎えることを思い描く詩もある。詩中にみえる「天堂」とは宮殿を意味し、宮中にはいることを願うのである。

今日好風光、騎馬上天堂。阿須(誰)家有好女、家(嫁)如(与)学是(士)郎(S三七二三紙背)。

今日の良き日、馬に乗り天堂に向かう。だれが家のよき娘、この学生の嫁になる。

今朝好光景、騎馬上天堂。須(誰)家好女子、嫁娶何○家(P四七八七)。

今日好風光、其(騎)馬上天堂(堂)。須(誰)家有好女、買?陰家道?清女夫郎(P三三一九紙背)。

可連(憐)学生郎、其(騎)馬上天堂(堂)。誰家有好女、嫁以(与)学生郎(P三三〇五)。

学生はさまざまな思いを抱きながら学業に励んでいる。学業に励む二人の学生の自作の詩を紹介する。

P二四九八の学郎李幸思は「李陵蘇武書」<sup>(24)</sup>を書写し終えて「天成三年(九二八)戊子歲正月七日学郎李幸思書

記」の題記の後に次の詩を書き付けている。

幸思比是老生児、投師習業棄無知。父母偏憐昔（惜）愛子、日諷万幸不滯遲。

幸思はいまや老学生、無知を棄てんと師に投じて学を受ける。父母はわが子をひたすら慈しみ、その幸せをかみしめて日々学んで滞ることなし。

S六二〇四の薛彦俊<sup>(25)</sup>は、「同光貳載（九二四）沽（姑）洗之月冥（莫）生壹拾貳葉、迷愚小子汝南薛彦俊、残水之魚、不得精妙之詞、略詠七言」と題記して次のように詠む。

童児学業切慙慙、累習誠望徳（得）人欽。但似如今常尋誦、意智逸出盈金銀。不樂利閏（潤）願成道、君子煩道不憂貧。<sup>(26)</sup> 数年誦誦何得曉、孝養師父求立身。

童子は学業にひたすらはげみ、学習をかさねて人の敬を受けんと望む。いま常に書をそらんじれば、知恵は金銀にまざるもの。利益を好まず道を成さんと願い、君子は道に悩むも貧を憂えず。数年の誦誦でどうして道理がわかるうか、師父に孝養を尽くし身を立てるを求めん。

「勤学」は童蒙教訓書の中では盛んに提唱されるテーマである。P二六〇七に「勤学書抄」と称される類書があり、勤学に関する故事や言葉を集めている。<sup>(27)</sup> また「勤学」を内容とする歌謡の「十二時」も敦煌写本に残されている。<sup>(28)</sup>

志をもって学問に励まんと努めていても、うまくいかない時もある。

男児屈滞不須論、今歲蹉跎虚度春。〇〇強健不学問、満行逐色陷没身。〇〇自身〇教勤、一朝得疾留後人（P三三〇五紙背）。

男子たるものぐずぐずするのは許されず、今年つまずき空しく春を過ごす。（？）強健であつても学問をし

ないのなら、色におぼれて身を滅ぼす。(?)、一朝にして病を得て人に遅れをとる。

鈔本は不鮮明なものであるが、以上のように読める。これの最初の二句と類似する句がP二五五五に署名もタイトルもない詩の中にもみえ、そこには「丈夫屈滞不須論、今載磋砣虚度春、無錢開口令人恨、有物皆談是好□」<sup>(29)</sup>とある。徐俊氏はこの詩を高適の詩とみて「別董令望」と擬題している。

ほかに次のような詩もある。

忽起氣腸(長) 嘘、何名大丈夫。心裏百事有、不那(奈)手中無(P三五七三紙背)。

ふとため息をつく、大丈夫とは何をいう。心に多くの思いあり、いかんせん手中には何もなし。

長沙の唐窯出土の磁器に「□起自長呼、何名大丈夫。心中万事有、不□□中無」の詩もみえる。

学生ではないが、沙門も懊悩する。

我是沙門僧、本来無怨惡。口解如是理、心多煩惱作(P二六九〇紙背)。

われは沙門僧、本来ならば怨惡はない。口では理を解しているが、心は多くの煩惱をなす。

#### 四

雑写の間に走り書きした詩は学生のさまざまな姿を活写している。落書きのように書かれていて意味がとおりにくい詩もあるが、いくつか並べてみる。

他人の悪口をいう学生。

学郎漢「□」郭会昌、看看一似憨頭狼。世間薄酒総飲尽、一朝出来褥城隍(P二七紙背)<sup>(30)</sup>

学郎の郭会昌、見よその馬鹿ものを。世間の薄い酒を飲みつくし、朝には城隍廟に横たわる(?)。

法師尋常大謀（模）様、今日小座屈不上。外辺似個猥糺人、莫是懷中没技量（P四七〇一紙背）

法師はいつもおおげさなふるまい、今日の小座は窮屈そう。そこからみれば出来る人、おそらく中身は技量なし。

おそくまで勉強する学生。

玉兔入酉（西）昏迷黒、隻字祿？辯（辨）不得。今朝亭覇（停罷）真救生、来晨課述筆自行（S四六五四紙背）

月傾いて黄昏いろも濃くなって、文字もぼんやり（？）見えなくなった。今日は終わりで休もう、明日の授業でまた筆を動かそう。

休みを待ち望む学生<sup>(31)</sup>。

竹林清（青）鬱々、伯（白）鳥取天飛。今照（朝）是我（假）日、且放学生郎（衍字か）帰（P二六二二）。

竹林は鬱蒼と青く、白鳥は天に飛ぶ。今日は休日、学生を帰してください。

この詩と同じ趣旨の詩が吐魯番文書（アスターナ三六三号出土文書）にもみえ、「写書今日了、先生莫酖池（嫌遅）。明「朝」是賈（假）日、早放学生帰（書写は今日で終わり、先生遅いと叱らないで。明日は休日、早く学生を帰してください）」という。

他人にはわからない書を書いて、得意になっている学生。

須（誰）人読自書、奉上百疋羅。来人読不得、迴頭便唱歌（P三四八六紙背）。

だれかわが書を読めたなら、薄絹百疋さしあげよう。来る人誰も読むことができず、振り返って歌うたう。人の紙に書を書く学生。

今日書他智（紙）、他來定是嗔。我今歸捨（舍）去、將作是何人（S三三八七）。

今日は人の紙に字を書いた、彼が来たら怒るだろう。私がいま帰ってしまえば、誰の仕業かわからない。

## 五

学郎詩は誤字も多く表現も稚拙で、たわいない内容の詩も多いものの、そこには中央のエリート階層の読書人とはまったく異なる民間の人々の息吹が感じられる。このような人々がおそらく敦煌の通俗文学の享受者であったのであろう。

最後に、州学博士を長く務めた翟奉達（字は奉達）<sup>(32)</sup>の書写後に翟再温（字は奉達）<sup>(33)</sup>は三首の詩を書き付けている。

三端俱全大丈夫、六芸堂堂世上無。男兒不学読詩賦、恰似肥菜根尽枯。<sup>(34)</sup>

三端そろった大丈夫、六芸堂々と世に並ぶものなし。男子たるもの詩賦を学ばねば、肥えた野菜の根が枯れるのに似る。

軀体堂堂六尺餘、走筆横波紙上飛。執筆題篇須意用、後任將身選文知。

四体は堂々六尺あまり、筆をとればすらすらと紙の上を縦横に。題篇を執筆すれば意趣ゆたか、後にその身は文知に選ばれる。

哽咽卑末乎、抑塞多不謬。嗟峨難遥望、恐怕年終朽。

卑しい身分にむせびなく、退けられても過ちはなし。さきは険しくかなたは望みがたく、年の終わりに朽

ち果てるのを恐れる。

翟奉達は、後にこの自分の詩を読んで、次のように書き添えている。

幼年之作、多不当路、今笑今笑。已前、達走筆題撰之耳、年廿作。今年遇見此詩、羞煞人、羞煞人。

幼年の作、なんと的はずれで、滑稽なことよ。むかし筆がすべってかきつけただけのもの、二十歳の頃の作。今この詩にたまたま出会い、恥ずかしい、恥ずかしい。

## 注

(1) 本稿で引用する学郎詩は、先行研究および徐俊纂輯『敦煌詩集殘卷輯考』（北京、中華書局、二〇〇〇）などを参考にし、原鈔本と照合したものである。

(2) このことは徐俊氏が「敦煌学郎題詩作者問題考略」（『文献』一九九四—二）ですでに指摘する。徐氏は、宋棗史『広卓異記』巻二に詩にまつわる故事が記されていることから、唐代にかなり盛んに伝えられ、辺境の学生の間でも抄録されたと述べる。この故事は『唐詩紀事』巻三にもみえ、『広卓異記』と若干異なる。

(3) 注(2) 徐文参照。

(4) この五言詩を記するという常套句はDx一七四四七の鈔本にもみえる。また書簡に詩を添えるという習慣もあり、林聰明『敦煌俗文学研究』（台北、私立東吳大学中国學術著作奨助委員会、一九八四）第五章「敦煌通俗詩考述」に「書札末附詩」にP五五五七、P三六三二、P三六三一、P二六二三の例が載っている。

(5) 林聰明『敦煌俗文学研究』第五章「敦煌通俗詩考述」及び張錫厚「敦煌詩歌考論」（『敦煌学輯刊』一九八九—二〇〇三）、敦煌民間詩歌（三）「感嘆抒懷之詩」の項に学郎詩というべき詩が載せられているが、林書、張文ではこれをとくに学生の書写による詩として他の詩と区別していない。

(6) のち楊秀清『華戎交会的都市—敦煌与絲綢之路』（敦煌文化叢書。蘭州、甘肅人民出版社、二〇〇〇）一九、亮麗的風景

—唐宋敦煌地区的學生生活—(九三—一二頁)として転載。

- (7) 顏延亮主編『敦煌文学概論』(蘭州、甘肅人民出版社、一九九三)「第十一章、敦煌詩歌」、周紹良『敦煌文学芻議及其它』『敦煌文学芻議』(台北、新文豐出版公司、一九九二)黃微・程惠新『劫塵遺珠—敦煌遺書』(蘭州、甘肅人民出版社、一九九九)「六敦煌文学文献、5詩歌雜詩(二〇〇—二〇二頁)」など。

- (8) 学郎詩の収集にあたつては、徐俊纂輯『敦煌詩集殘卷輯考』および同氏の「敦煌写本詩歌統考」(『敦煌研究』二〇〇二—五、これを「統考」と略称する)を用いた。また、張錫厚主編『全敦煌詩』(北京、作家出版社、二〇〇六)も参照した。

- (9) 那波利貞『唐鈔本雜抄攷』(『唐代社会文化史研究』東京、創文社、一九七四所収)参照。

- (10) 『山海經』の「海内南經」には「狴狴知人名、其為獸如豕而人面」、「海内經」には「有青獸人面、名曰猩猩」とある。『爾雅』釈獸には「猩猩小而好啼」とあり、その郭注に「山海經曰、人面豕身、能言語……」とある。

- (11) 猩猩の酒のことは、白居易の「感興」と題する詩に「樽前誘得猩猩血、幕上偷安燕燕巢」の句がみえ(『白氏長慶集』卷三二)、宋の陸游の「小築」に「生来不啜猩猩酒、老去那营燕燕巢」がみえる。

- (12) 徐氏統考によれば台北の傅斯年圖書館蔵本にも「郎君須立身、莫共酒家親」の二句がみえる。

- (13) 注(8)の項楚『敦煌變文選注(増訂本)』(北京、中華書局、二〇〇六)五八〇頁。項楚氏は「狴狴鳥」に注をし「狴狴」は「猩猩」に同じとするが、「猩猩」と「鳥」の関連については明確な注釈はされていない。

- (14) 徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』(七〇—一頁)によると、Dx三八七一、P二五五五の唐人の詩文集にこれと似た詩があり、それを岑参の作としている。その詩は「今朝心裏会会(晦晦)、不意更将愁来对、共君好酒覓五升、一起送愁千里外」。

- (15) この句の二句目の意味がはっきりしないが、徐書の校訂にそつて訳す。「杣」は「杣」と同じで「うるち」のことで、ここでは同音の「鮮」の仮借として訳す。

- (16) 項楚『王梵志詩校注』(上海古籍出版社、一九九二)四八三頁。

- (17) 任半塘『敦煌歌辭總編』(上海古籍出版社、一九八七)一二八八頁。

- (18) 「寫」は『広韻』入声一八葉、入声二二昔の二音あるが、「驢」は『広韻』上平声九魚韻で「寫」と「驢」は押韻しない。「寫」には特別の読み方があったのであろうか。



(19) 柴劍虹「読敦煌学士郎張宗之詩鈔札記」(同氏『敦煌吐魯番學論稿』杭州、浙江教育出版社、二〇〇〇所収)によれば、中国書店藏敦煌写本「仏説無量寿宗要經」の紙背に三首の五言詩の書写があり、末尾に「癸未年十月永安寺学士郎張宗之書記之耳」の題記がみえたとある。その二首目に「雲雲(悠悠)天上去(雲)、父母生我身、少坐(来)学礼(裏)坐、長大得成人」とある。

(20) 『吐魯番文書(参)』文物出版社、一九九六、五八二頁。龍晦「卜天寿《論語》抄本後的詩詞雜錄研究和校釈」(『考古』一九七二—三)参照。敦煌写本「秋胡變文」に「前闕」三公何処来」の句がみえる(項楚『敦煌變文選注(増訂本)』三六二頁)。

(21) 徐俊「唐五代長沙窑瓷器題詩校證——以敦煌吐魯番写本詩歌參校」。

(22) 『法藏敦煌西域文獻』(上海古籍出版社)でのタイトル。この鈔本は第一首題に「白侍郎蒲桃架詩一首」とあるほかは、題名も撰人名もない。最後に「乾符四年(八七七)靈図寺僧比丘〇〇」と題記がある。

(23) 「都頭」は役人の頭領という意味であろう。江藍生・曹広順編著『唐五代語言詞典』(上海教育出版社、一九九七)一〇〇頁参照。

(24) 李正宇「敦煌學郎題記輯注」(『敦煌學輯刊』一九八七—二)によると李幸思の名は敦煌絵画の松本栄一『敦煌画の研究・図録編』に載る「宋乾徳四年(九六六)曹元忠及夫人修北大像記」にあり「都頭知子弟虞候」の肩書きを持つとある。これは大英博物館に所蔵される絵画(スタイン絵画七七)にみえる文章で、荣新江『海外敦煌吐魯番文獻知見録』南昌、江西人民出版社、一九九六)一〇頁に録文がある。

(25) S二六一四の目連變文の題記に「貞明七年(九二二)辛巳歲四月十六日浄土寺學郎薛安俊写」とあり、この「薛安俊」は「薛彦俊」と同一人物であることが判明している。藤枝晃「敦煌曆日譜」(『東方學報(京都)』三一、一九七三)。

(26) 『論語』衛靈公「君子憂道、不憂貧」。

(27) 王三慶『敦煌類書』(台灣高雄、麗文文化事業股份有限公司、一九九三)二八九—二九〇頁。

(28) 任半塘『敦煌歌辭總編』一二八八頁。任書はこの十二時を「發憤勤學」と名づける。

(29) 徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』六九七頁。

(30) 鈔本未見。徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』八四一頁。

(31) 『新唐書』卷四四選舉志に中央の学校の休暇について「旬給假一日。前假、博士考試：每歲五月有田假、九月授衣假」とあり、十日ごとに一日の休みがあり、休みの前には試験がある。五月には田假（農繁期の休み）、九月には授衣假（衣替えの休み）があつたことがわかる。敦煌でも、休暇はこのようであつたと推測される。

(32) この詩は向達「記敦煌石室出晋天福十年写本寿昌県地境」（『唐代長安与西域文明』（北京、生活読書新知三聯書店、一九七九二刷、四三九頁）にも引用される。「全唐詩統拾」卷四二（『全唐詩補編』（北京、中華書局、一九九二）にも所載。

(33) 「十二時（勸学）」に「羨他德義美三端」の句がみえる。任半塘『敦煌歌辭總編』一五五七頁。『韓詩外伝』卷七「是以君子避三端、避文士之筆端、避武士之鋒端、避弁士之舌端」。梁簡文帝「舌賦」「夫三端所貴、三寸著名」。

(34) 「十二時（發憤勸学）」に「人生在世須臾老、男兒不学讀詩書、恰似園中肥地草」の句がみえる。注(17) 任半塘『敦煌歌辭總編』同頁。

「学郎詩 (題記あり) 一覧リスト」 文献名の「」は鈔本中に題名があるもの、( ) は内容から判断した擬題。

備考の略号 [池]: 池田温『中国古代写本誦語集録』(東京大学東洋文化研究所、1990)、数字は池田書での番号。

[李]: 李正宇『敦煌学郎題記輯注』(『敦煌学輯刊』1987-1)、数字は李文での番号。

[項]: 項楚『敦煌詩歌導論』第三章第六節学郎詩(台北、新文豐公司、1993)、数字は頁数。

[徐]: 徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』(北京、中華書局、2000)、数字は頁数。[徐統考]: 徐俊『敦煌写本詩歌統考』

『敦煌研究』2002-5。

鈔本番号	文献名	年号	西暦	書写者	詩の形式と数	備考
P2498	(李陵与蘇武書)	天成三年戊子歲正月七日	928	学郎李孝恩書記	七言四句一首	池 2235、李 47、項 214、徐 768.
P2604	「誦語卷第一」	大中七年正月十八日	853	伯明書記	四言四句一首、 七言二句のみ	池 1860、徐 880.
P2621	「事森」	戊子年四月十日	928 ?	学郎員義寫書故記	五言四句一首	池 2236、李 92、徐 774.
P2622	「吉凶書儀上下両卷」	大中十三年四月四日	859	午時寫了	七言四句三首、 五言四句三首	李 9、項 211、徐 775. 紙背雜写中 に九首
P2668	「新菩薩經一卷」	乙亥年四月八日	915	布衣翟奉達因施主清恭故造經句而述七言	七言四句二首	徐 780.
P2746	「孝經一卷」	歲至庚辰月造秋季日達第三	860	寫詩竟記、後有餘紙、輒造五言拙詩一首	五言四句一首	李 76、項 214、徐 783. 翟○○郎君、 翟○○詩卷
P2937v	(紙表は太公家教)	維大唐中和肆年二月二十五日	884	沙州敦煌郡學士郎兼充行軍除解○太學博士宋榮達	五言四句一首	李 25.
P2947	(仏經答難)	甲寅年四月十八日	834	書記	五言四句一首	池 1041、徐 785.
P3189	「開蒙要訓一卷」			三界寺學士郎張彦宗寫記	五言四句一首	池 2507、李 123.
P3192	「誦語卷第六」	丙子年三月五日	856	寫書了、張○○說	五言四句一首、 七言四句一首	池 1904、項 213、徐 791.
P3305	「誦語卷第五」			學生李文段書一卷	五言四句四首	李 142、項 212、徐 701. 紙背に七言六句一首?
P3322	(ト笠書)	庚辰年正月十七日	860	學生張大慶書記之也	四言四句一首、 五言四句二首	池 1962、李 75.
P3386	「楊萬山詠孝經一十八 章」	維大晋天福七年壬寅歲七月 廿二日	942	三界寺學士郎張富盈記		池 2300、李 54.
		戊辰年十月三十日	968	三界寺學士	六言四句一首	池 2389、李 102、徐 799.
P3433	「誦語卷第八」	手(丁)未年十月十六日	9C 前期	張堅々寫畢功了	四言四句一首	池 1854.
P3534	「誦語卷第四」	亥年四月七日	9C 前期	孟郎々寫記	五言四句一首	徐 917.

鈔本番号	文献名	年号	西暦	書写者	詩の形式と数	備考
P3780	[寒婦吟一卷]	1 順徳二年丁巳歳二月十七日		楊定運手合書		
		2 順徳二年丁巳歳二月十七日	957	就家学士馬富徳書記	四言四句一首	李 58、項 58、徐 252.
		3 大周順徳四年丁巳歳二月十九日	957	学士童児馬富徳書記		李 59.
P3780v		1 丙子年五月十五日	976	学士郎楊定運自手書記之耳也		李 105.
		2 大周順徳四年丁巳歳九月二十七日	957	就家学士郎		李 60.
		3 大周順徳四年丁巳歳九月口日		就家学士郎馬富徳書記		李 61.
P3906	[字宝碎金一卷]	天福柒年壬寅歳肆月貳拾日	942	伎術院学郎知慈惠郷書手呂均書	七言四句二	李 53、徐 826.
P4588r v	[太公家教一卷]	壬申年十月十四日	912	学仕郎張盈信紀書之二(耳)	七言四句一首	池 2398、李 80、徐 823. 紙背に七言四句一首
S614	[免國策第一]	巳年四月六日		学生桑廣翼写了	五言三句	池 1857、李 113、徐 917. 本文の筆と異
S692	[寒婦吟一卷]	貞明伍年巳卯歳四月十一日	919	敦煌郡金光明寺学仕郎安友盛写記	五言四句一首	池 2174、李 40、項 219、徐 854.
S728	[孝経一卷]	丙申年五月四日	936	靈図寺沙弥徳栄写過、後継弟子梁子校		池 2774、李 94.
		2 庚子年二月二十五日	940 ?	靈図寺学郎李再昌巳、梁子校		李 95.
S728 v					七言四句一首	李 134.
S4295v	(雑写)	開宝肆年壬申歳四月六日	972	押衙知文司書手吳達	七言四句一首	徐 880.
S6204	(学郎薛彦俊詩)	同光貳歳沾(姑)洗之月冥(亥)生壹拾貳葉	924	迷愚小子汝南薛彦俊	七言八句一首	項 215、徐 899.
凡 x 17447rv	[太公家教一卷]	“上欠”九月口日		呂惠達書記、学 [下欠]	五言詩三首(欠多し)	徐統考、断片。
北 8317 (玉 91) v	紙表は [七階礼仏名経]	1		沙弥榮惠々写詩五首、其中一首云	五言四句四首、七言四句一首	項 214、徐 916.
		2 巳年六月十二日		沙弥榮惠々書巳		
北 8442 (位 68)	[百行章一卷]	1 庚辰年正月廿一日	920	浄土寺学使郎王海閨書写、鄧保住、薛安俊札		池 2176、李 84.
		2 庚辰年正月十六日	920	浄土寺学使郎鄧保住写記述也、薛安俊札用	五言四句二首	李 85.
北新 836v	(逆刺占)	于時天徳貳歳歳在壬戌四月丁丑朔七日	902	河西敦煌郡州学上足弟子翟再温記	七言四句二首 五言四句一首	池 2119、李 35、項 923. 詩後書付あり。 鈔本未見。
中国書店蔵本	紙表は [仏説無量寿宗要経]	癸未年十月	923	永安寺学士郎張宗之書記之耳	五言四句三首	徐 285、928. 鈔本未見。
日本三井 103v	紙表は [成唯識論第七]			不羅奴孔目官興奴孔目書字上手記耳	五言四句三首	徐 937. 鈔本未見。

学郎詩 (題記なし)

抄本番号	文献名	詩前の語	詩の形式と数	備考
P2690v	(雑写)		五言四句三首	徐 781
P2738v	(雑写)		五言四句一首	徐 782
P2995	(姓氏書)		七言四句一首	項 214、徐 787
P3319v	(雑写)		五言四句?一首	徐 897
P3441v	(紙表は「論語卷第六」)		五言四句一首	
P3486v	(雑写、紙表は開蒙要訓)		五言四句一首	項 212、徐 802
P3573v	(紙表は論語義疏)		五言四句一首	徐 805
P3812v			七言四句一首	徐 823
P4525 (1) v	(断片)	保徳云	七言四句二首	徐 831
P4525 (5) v	(断片)		七言四句二首	徐 831
P4701v	(嘲法師詩)		七言四句二首	徐 836
P4787	(断片)	見白詠一絶	五言四句一首、七言四句一首	徐 837
P5557v	(紙表は古文尚書鳳征)		五言四句一首	徐 880、詩末尾に「丁亥年正月廿日靈隠寺智弁書」とあり。
Pt27v			七言四句四首	徐 841、鈔本未見。
S173v	(雑写、紙表は李陵与蘇武書)		五言二句	徐 917
S1084v	(嘲沙弥詩)		七言六句	項 218、徐 859
S1824v	(紙表は受十戒文)		五言四句一首	項 219、徐 865
S3713	(金剛經疏)		五言四句一首	徐 879
S3287	「千字文一卷」		五言四句一首	徐 141
S3724v	(雑写、習字)		五言四句一首	徐 880
S4129v	(紙表は崔氏夫人訓女文)		七言四句三首	徐 883
S4654v	(雑写、習字)		七言四句一首	項 212、徐 890
S8448 (c)	(雑写)		五言四句一首	徐 918
北 6811 (帝 78) v			七言四句一首	徐 286
北 7220 (淡 50) v			詩詞七種	徐統考
北 8347 (生 25) v			五言四句一首	項 215、徐 916
北 8374 (宿 99) v	(紙表は嵯宗安心義)	五言詩一首、贈上		項 220、徐 918